

教育講演

いまさら聞けない動脈硬化学3

脂質異常症の身体所見

2016年7月15日(金) 13:20-13:50 第4会場 | 本館 5階 コンコードC

朔 啓二郎 (福岡大学医学部 心臓・血管内科学)

日本語

EL3

脂質異常症の身体所見

野原 淳:1,2、馬淵 宏:3

1:金沢大学医薬保健研究域 医学教育研究センター、2:金沢大学病院 循環器内科 コレステロール外来、3:金沢大学大学院 医学系研究科

脂質異常症とは血清脂質の異常であるが、見逃してはならない身体所見が診断の鍵となることがある。診察においては家族歴の聴取と共に、重要な身体所見を常に念頭に置くことが重要である。

主たる所見は、皮膚、腱、眼、心血管系の診察から得られる。

高コレステロール血症で一度もアキレス腱の触診をしないことは許されない。家族性高コレステロール血症(Familial Hypercholesterolemia : FH)において、腱黄色腫は診断基準の一つであり、高LDL-C血症であればFHと診断して良い。アキレス腱肥厚はレントゲン撮影で9mm以上あれば肥厚と判断されるが、慣れれば触診でおおよその厚みを把握できる。皮膚黄色腫を認める場合はただ事では無い。乳幼児期に皮膚黄色腫を認めればFHホモ接合体を念頭に置いて診療する。家族歴との照合も重要であり、黄色腫が明確でも家族歴が乏しい場合や血清コレステロール値がさほど高くない場合は、シトステロール血症や脳腱黄色腫症、常染色体劣性高コレステロール血症などの鑑別が必要になる。

III型高脂血症では手掌や手指屈側の皺襞に沿って盛りあがる様に生じる手掌線状黄色腫が特徴的である。ただしFHの腱黄色腫とは異なり薬物療法ですみやかに消退していくため、III型を疑ったら早期に確認するのが良い。

原発性高カイルミクロン血症 (LPL欠損症) では四肢伸側などに発疹性黄色腫が見られ、また眼底では網膜脂血症が特徴的所見と言える。いずれも一過性であり初診時に念入りに診察する必要がある。肝脾腫を呈する症例もある。

弾性線維性仮性黄色腫(Pseudoxanthoma elasticum : PXE)は脂質異常症ではないが、仮性黄色腫と呼ばれる特徴的な黄白色扁平丘疹が頸部や関節屈曲部にみられ、リスク因子が乏しくても血管の石灰化が進行して心血管イベントを生じる疾患である。

身体所見は知ってさえいれば診断に大きく近づけるものが多い。上記に挙げたもの以外にもTangier病、魚眼病などの身体所見も取り上げる。